

平成30年6月6日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16648

研究課題名(和文) イスラーム写本絵画にみる模倣の形成と展開についての実証的研究

研究課題名(英文) A Study on the Tradition and Development of Figural Representation in Islamic Book Painting

研究代表者

林 則仁 (HAYASHI, NORIHITO)

龍谷大学・国際学部・准教授

研究者番号：20738215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：宗教的な理由で多くの建築装飾や美術品などに人物や動物の具象表現が避けられてきたイスラーム地域において、人物や動物の姿が挿絵のなかで多く描かれている写本絵画はイスラーム地域における具象表現の展開を知る上で数少ない資料である。本研究では、アル=カズウィーニーの『被造物の驚異』の挿絵における図像表現の伝統と革新について初年度はニューヨークにおいて調査し、2年目はイスタンブールとドーハで調査を実施した。トプカプ宮殿博物館附属図書館での写本調査は、これまで知られていなかった複数の写本を確認、その重要性を指摘した。研究成果は本研究を基課題とする「国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)」に発展させている。

研究成果の概要(英文)：In Islamic regions the figurative expression of human beings and animals is basically excluded in sacred places and in religious materials due to the idea of iconoclasm. However, it has established itself as a distinctive development in the form of illustrations in secular books. This study explores the tradition and development of figural representation in Islamic book painting by focusing on al-Qazwini's Wonders of Creation. In the first year, I visited New York Public Library to look at Sarre Qazwini, and in the second year, I visited Topkapi Palace Library and Islamic Art Museum in Doha to research Qazwini manuscripts. The result of this study has been developed as Joint International Research with a cooperate researcher.

研究分野：イスラーム美術史

キーワード：イスラーム美術史 写本絵画 被造物の驚異

1. 研究開始当初の背景

イスラーム美術史の研究にとって写本絵画の解明は重要な役割を担っている。宗教的な理由で多くの建築装飾や美術品などに人物や動物の具象表現が避けられてきたイスラーム地域において、人物や動物の姿が挿絵のなかで数多く描かれている写本絵画は、イスラーム地域における人物・動物の具象表現の展開を知る上で数少ない貴重な資料である。カリグラフィや植物・幾何学・文字文様を美術の主題として置くイスラーム美術のなかで、人物・動物の具象表現は写本の挿絵のなかでのみ独自の発展を遂げており、18世紀に至るまでその発展はイスラーム地域(とりわけ西アジア)で盛んだったことが写本絵画から理解できる。

このイスラームの写本絵画研究は100年ほど前から西ヨーロッパ(主にイギリス、ドイツ、フランス)を中心に取り組みが始められ、これまでに多くの重要な研究がなされている。現在でも基礎となっている研究はThomas Arnoldの著作(文献1)やErnst Kuhnelによる著作(文献2)、Ivan Stchoukineによる著作(文献3)やRichard Ettinghausenによる著作(文献4)などが挙げられるが、これら研究は、写本絵画に描かれた図像の(多くの場合、西洋美術史的視点からの)解明や絵画様式の編年を中心とし、イスラーム写本絵画史の流れを把握することを目的として取り組んできた。

我が国においては、近年になってようやく複数の研究者たちが写本絵画の時代的地域的特質や様式論などを展開するようになり、榎屋友子氏の著作(文献5)や小林一枝氏(文献6)、鎌田由美子氏の論考(文献7)では、日本のイスラーム美術研究のひとつの大きな成果が表れている。

そのなかで、本研究代表者はこれまでイスラーム写本絵画における様式の形成と展開について継続的に研究を行ない、図像、絵画表現や背景の描写に模倣の伝統があることに着目してきた。

これまでのイスラーム写本絵画研究では、特定の挿絵または特定の写本を対象にして絵画表現や図像の調査を行なったもの、もしくは特定の時代・地域のなかで制作された写本絵画の様式について分析を行なったもの、のいずれかが主流をなしてきた。これら研究によって多くの作品や時代・地域が調査対象とされて明らかにされたことも多い。そのなかで、イスラーム写本絵画を体系的にイスラーム美術史のなかに位置づけるという試みがなされる準備は十分とは言えないまでも整っているように思えるのだが、この試みは未だ活発ではない。これまで、写本絵画研究として作品や時代・地域に注目する一方で、著作ごとの挿絵研究がまだ十分になされていないことがその一因として議論される。同一著作の複写本の挿絵を、時代や地域を超え

て比較分析する研究が不足しているために、イスラーム写本絵画の文化を体系的に扱うことができていない。その結果、それぞれの時代・地域における絵画様式のみが断片的にイスラーム美術史の中に存在している形となっている。

(文献1)Arnold, Thomas. *Painting in Islam: A Study of the Place of Pictorial Art in Muslim Culture*, (Oxford, 1928)

(文献2)Kuhnel, Ernst. "Painting and the Art of the Book," *A Survey of Persian Art*, (London&Tokyo, 1939)

(文献3)Stchoukine, Ivan. *Les Peintures des Manuscrits timurides*, (Paris, 1954)

(文献4)Ettinghausen, Richard. *Arab Painting*, (Geneva, 1962)

(文献5) 榎屋友子『イスラームの写本絵画』2014年、名古屋大学出版会

(文献6) 小林一枝『『カリラとディムナ』写本挿絵の形成と伝播-東西美術における動物寓話図像研究序』、『美術史』(40-2, 1991年)

(文献7) 鎌田由美子 "A Taste for Intricacy An Illustrated Manuscript of *Mantiq al-Tayr* in the Metropolitan Museum of Art," *Orient*, (Vol.45, 2010年)

2. 研究の目的

本研究では、従来あった写本絵画の図像分析や具象表現の特徴についての解明ではなく、ひとつの著作の複写本の挿絵を時代の流れに沿って追っていき、いかに絵画表現の伝統が形成され、それが模倣されながら新しい表現に変貌していくのかを挿絵の比較分析をすることで明らかにしていくことが目的である。これを遂行するにあたり、研究代表者がこれまで行なってきたアル=カズウィーニーの『被造物の驚異 (*Ajaib al-Makhlūqat*)』の挿絵研究が本研究の基礎となっている。

3. 研究の方法

本研究で扱う写本絵画の著作は、これまで研究代表者が実証研究への準備を行なってきたカズウィーニーの『被造物の驚異』とし、本研究ではこの著作の挿絵における模倣の伝統と変貌について研究を行なう。模倣の伝統を解明するうえで、(1)模倣の基礎となる初期の複写本の挿絵を調査し、その特徴を分析する、(2)初期の複写本の挿絵から年代順に挿絵の比較分析を行ない、模倣の詳細な解明を行なう、(3)そのうえで、模倣の伝統から脱して新しい表現に変貌している点を分析し、その特徴を明らかにする。これらを踏まえて、変貌を遂げるに至った背景をパトロンや制作環境などから探り、写本絵画以外のメディアで見られる絵画表現との比較分析

を行ないながら、イスラーム美術史における写本絵画の位置付けについて踏み込んで議論を行なう。

4. 研究成果

(1) 主要図書館における写本調査

カズウィーニーの『被造物の驚異』の複写本は13世紀以降18世紀までイラン・トルコ・インドなどで絶えることなく制作されており、それらは世界の主要な図書館に数多く所蔵されている。これまでの研究によってその多くに挿絵が施されていることが確認できており、それら挿絵を体系的に調査することによってイスラーム写本絵画における模倣の伝統と変貌についての実証的な研究が可能となる。

これまでの研究において、16世紀以前に制作された複写本はわずかだということがわかってきたが、未だ閲覧調査できていない複写本が存在するため、まずは16世紀以前の複写本の調査を行なった。本研究では、まずこれまで研究代表者が作成してきた『被造物の驚異』の挿絵入り複写本の所蔵情報に基づき、閲覧及び挿絵画像の収集が未完の複数の写本調査を行なった。

<ニューヨーク公共図書館>には、16世紀以前の制作と考えられる複写本が所蔵されており、閲覧及び挿絵画像の収集を現地で行った。写本所蔵番号<Spencer, Pers.ms.45 (以下、「ザッレ本」とする)>は全頁のうち、143葉が綴られていない状態で所蔵されており、ワシントン・フリーア美術館にはこの複写本の残部(83葉)が所蔵されている。この複写本は、20世紀初めにドイツの東洋学者フリードリヒ・ザッレ(1865-1945)の蔵書として知られ、1910年代には博覧会に出展されており、ザッレ写本に言及した研究も多い。その一方で、この複写本の年代特定に関しては未だ議論が分かれており、Badieeは15世紀トゥルクマン朝時代のディヤルバクルで制作されたものとしたが、その後Schmitzは17世紀に制作された可能性を示している。本研究では、ニューヨーク公立図書館所蔵の143葉すべての閲覧及び挿絵の撮影を行ない、同時代とその前後の時代の『被造物の驚異』複写本と比較分析し、模倣の伝統について考察を行なった。

<トプカプ宮殿博物館附属図書館>は、2013年まで改修のため長期間閉館されており、これまで蔵書目録でのみ『被造物の驚異』の複写本の所蔵が確認できた。本研究ではおそらく世界で初めてトプカプ宮殿附属図書館所蔵の『被造物の驚異』全複写本の調査を実施する許可を得られたため、現地で複写本の閲覧及び挿絵画像の収集を行なった。その中でも特筆すべき複写本は<H.403> <H.406> <H.408> <H.410> <R.1659> <R.1660>の6写本であろう。これら大多数が未だ未出版の状態にあり、本研究成果によって初めて世に出

るものも多い。16世紀後半にイランのシーラーズで制作されたものと考えられるH.408写本は、これまで未出版で蔵書目録にも入っておらず、その存在は今回の調査まで知られていなかったが、非常に多くの挿絵を含んでいるばかりか、その画像表現は模倣の伝統からの変貌が強くみられ、本研究においてとても重要な資料となった。また、これまでに写本の一部が出版されているH.410, R.1659, R.1660についても写本全体の閲覧及び挿絵画像の収集によって改めて非常に重要な資料であることを確認できたと同時に、模倣の伝統の展開を見る上でも価値の高い資料であることがわかった。とりわけ、トゥルクマン様式で挿絵が施されているH.410は884年(西暦1479年)にムハンマド・バッカールという書家がイランのシーラーズで制作したことが奥書に記されているが、ロンドンの王立アジア協会に所蔵されている『被造物の驚異』写本(Ms.178)は同一の書家がほぼ同じ時期に制作したものであることが知られている。このように同時期に同一人物が同一著作を複数制作する例はこれまであまり知られておらず、模倣の伝統の背景を知る上で貴重な資料となるであろう。

<ドーハ イスラーム美術館>は近年設立されたイスラーム美術を扱う美術館の中でも最大規模のコレクションを誇り、カタールの王族の庇護のもと、文化的価値の高いイスラーム美術品を収集している。ドーハ・イスラーム美術館には2002年にロンドンのサザビーズで落札された『被造物の驚異』が収蔵・展示されており、本研究ではこれを調査対象とした。当該写本はサザビーズにて出品される際にCarboniとContadiniによって挿絵の調査が実施され、エジプト・マムルーク朝時代のものと断定されている。『被造物の驚異』複写本においては16世紀以前にエジプトで制作されたものは当該写本以外に知られておらず、挿絵の画像表現も同時代及び前後の時代のものと異なる特徴を持っている。しかし残念ながら、写本そのものの保存状態は極めて悪く、断片的にしか現存していないことがわかった。現在保存されているわずか数葉から模倣の伝統について分析することは困難であるが、マムルーク朝時代の写本絵画の伝統と比較分析を行ない、当該写本の位置づけを試みた。

(2) 異形の身体の画像表現と伝統の分析

上記の諸図書館及び美術館での調査を踏まえて、模倣の伝統と変貌についての解明に取り組んできたが、特に『被造物の驚異』の挿絵のなかで、異形の身体を持つ種族や動物などの画像表現に模倣の伝統が強く確認できることがわかってきた。『被造物の驚異』には、犬の頭を持つとされるサグサル族や足に骨のない軟足人種のドヴァール・パーなど異形の身体を持つ種族が多く登場するが、その画像表現には伝統的な描写が当てられて

おり、この伝統は『被造物の驚異』写本を超えて、イスラーム写本絵画及び金属器など他の媒体にもみられることがわかってきた。特にサグサルに関しては、13世紀前半にイラクのモスルで制作された金属器にその図像の前身とも取れる描写が確認でき、『被造物の驚異』にみられる図像表現の起源の解明につながる手がかりになると考えられる。

(3) 国際共同研究加速基金の採択

本研究の研究代表者は、本研究を基課題とした2017年度国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)に採択された。これにより、本研究の成果を国際研究プロジェクトに発展させるため、ロンドン大学東洋アフリカ研究院のAnna Contadini教授とともにイスラーム写本絵画における図像表現の伝統と革新に関する共同研究を開始している。本研究では『被造物の驚異』における模倣の伝統を扱ったが、その成果を発展させてイスラーム写本絵画(特にアラブ絵画)における図像表現の伝統について広い視野から考察を試みる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

林 則仁 “Scientific or Narrative? The Tradition of Illustration of the al-Qazwini’s *Ajaib al-Makhlūqat* in the late 15th Century Persian Manuscripts,” *Advanced Science Letters*, vol.23, No.5 (2017), pp.4701-4704. (査読あり)

林 則仁 “Toward the Appropriate Definition of Turkman Style Painting from the 15th Century Iran -The time of Pir Budaq,” in *Dakam’s International Regional Studies Meeting Conference Proceedings*, June 2017, pp.65-76. (査読あり)

[学会発表](計3件)

林 則仁 “Scientific or Narrative? The Tradition of Illustration of the al-Qazwini’s *Ajaib al-Makhlūqat* in the late 15th Century Persian Manuscripts,” クアラルンプール、2016年12月6日(審査あり)

林 則仁 “Toward the Appropriate Definition of Turkman Style Painting from the 15th Century Iran,” *Dakam’s International Conference on Iranian Studies 2017*, イスタンブル、2017年6月2日(審査あり)

林 則仁 「イスラーム世界の博物誌にみる異形の身体」、驚異と怪異 想像界の比較研究、国立民族学博物館、2017年7月9日

[図書](計1件)

林 則仁 「中東イスラーム世界の写本絵画と驚異」山中由里子編『<驚異>の文化史 中東とヨーロッパを中心に』2015年、名古屋大学出版会、pp.138-153.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 則仁 (HAYASHI NORIHITO)

龍谷大学・国際学部・准教授

研究者番号：20738215

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし